

## ブルドックソース

何時頃だったか記憶に無いが、妻が子供達の微笑ましいエピソードを話してくれた。

長男四才、二男が二歳の頃の話だ。性格は違うが親から見ても仲良し兄弟である。兄は少々ぶざげっ子で、弟の方は坊ちゃん育ちの気がある。

我が家の町内会で飼犬にブルドックを飼っている家があった。雄と牝の番いで飼っていて子犬が産まれたとき、飼わないかと勧められた事があった。血統書付の親犬から産まれた子犬だと言うが、値段が高い。子供達にせがまれたが買わなかった。それにあの犬相だ。番犬にはもってこいだろうが、好きになれない。

店にスピッツの子犬を抱いて買物に来た婦人が居た。子供達に欲しいとせまがれ4千円のラジオと交換、婦人は子犬を置いて帰って行った。

ヨチヨチ歩きの子犬に、兄洋一が「チル」と名前を付け、子犬に似合う首輪と綱を着けて二人で出かけるが、途中ブルドックと出会った事があったようだ。

妻は買物に出掛ける時、二人を連れて行く。弟二郎をおんぶして洋一は手を繋いで行くが、途中ブルドックを飼っている家の前を通る。洋一は二郎に悪い入れ知恵したらしい。

二郎がある日「ブルドックの何処からソース取るの」と母親に聞いた。妻はまさか「ブルドックの・・・ですよ」とは言わなかったと思うが返答に困ったろう。

ソースの容器には怖い顔のブルドックのシールが貼ってある。二郎は一人で疑問に思って、母親に聞いたのか、又洋一が散歩のとき、二郎に「ソースはあの犬から取る」とぶざげて教えたと思われる。その内確かめてみたいと思うが、幼い時だから、覚えて居ないだろう。

我が家の食卓には何時も「ブルドックソース」が置いてある。私はソースが好きで、何にでもかけて、食べている。

時々、ソース瓶のブルドックの絵を見る時、幼い子供達の無邪気な姿を、記憶の底から引き出し感慨に耽るのである。